

69名の新入生を迎えて平成24年度がスタートしてあっという間に一ヶ月間が経ちました。この間、特に心配になることもなく、順調な新年度の始まりとなりました。毎年この時期は特に新入生とその保護者の皆さんが不安に思うことがないように心がけてきたつもりですが、何点かご連絡をいただいてから「なるほどそうだった」と思うことがありました。また、子どもたちの小学校での生活の様子が保護者の皆さんになかなか伝わりにくいこともあり、新入生の保護者の皆さんへのご連絡には特に配慮が必要であると改めて感じました。

これから夏までの間、学校では、球技大会、中間試験、音楽集会、授業参観、サマーキャンプなどがあります。また、保護者の皆さんとは保護者球技大会、校内美化活動などでご一緒できる機会もあると思いますが、いろいろな機会に学校での子どもたちの様子（友だちと遊ぶ姿、学習活動に取り組む姿）をご覧になっていただきたいと考えています。

【交通事故から子どもを守ろう】

4月に相次いで登下校中の子どもたちが被害者となってしまったしい交通事故がありました。ハンドルを握るドライバーには安全運転に対する意識を高く持ってもらわないといけません。歩行者も交通ルールを守り、危険から身を守らなければなりません。道路を横断するときも歩行者用信号が青になっていても自分の目で安全を確認するのは当然のことです。

さて、子どもたちの安全に対する意識はどうでしょうか。私が学校から駅までの道を歩く子どもたちの様子を見ている限りでは、決してそれが高いとは言えないでしょう。信号のある道路でも、自分で確認をせずに前を歩く人について行く子もいます。そういう子は信号が赤に変わっても自分で気づくことができません。誰かが見てくれているからという安心感がそうさせてしまうのかもしれないですが、2重、3重の安全に対しての備えがあってほしいものです。

保護者の皆さんには、改めてお願いがあります。

自宅から一歩外に出たら子どもたちは自分で自分を守らなければなりません。赤信号で道路を渡ったり、信号や横断歩道のないところを渡ったりしないことは家庭での教育の一つとしてしっかりと教えないといけないことです。自転車やバイク、さらには自動車と一緒に通行する道路で気をつけるべきことについて再度確認をお願いします。特に危険であると思われる場所、事故が多発する場所があればできればその場と一緒に行って何が危険で、どう気をつけるべきなのかを話してあげてほしいです。

先日の朝会でも、「大切なことは自分の命を守ることです」と子どもたちには伝えました。学校、家庭みんなの力で子どもたちを守っていきましょう。

【小学校の役目】

12年間一貫教育の中で小学校の果たすべき役目について常々考えています。中学校に進学すると、桐光学園小学校から進学した70名ほどの子どもたちは外部から入学してくる約300名の子どもたちと一緒に生活していくこととなります。男子は5名ほど、女子は8名ほどが同じクラスとなります。圧倒的に外部からの入学生が多い中で、小学校の卒業生は頑張っています。

先週の土曜日には中学校の説明会がありました。毎年行っているもので、参加は、6年生の児童と保護者、そして4・5年生の希望する保護者でした。同じ敷地内にある中学校と高等学校ですが、保護者の皆さんにはあまり中高の様子は伝わっていないと思います。今は様々な情報を自分で入手できますから、ある程度のことは調べていただくこともできるでしょうが、今回のように中高の校長・教頭の話を通じて直接聞いていただくことも大切だと考えます。説明会に参加した子どもたちからは、勉強のこともそうですが、クラブ活動などへの関心の高さが感じられました。クラブ活動は、特に中学校での生活にはとても大切なものですからそれを楽しみにしてもらえることは嬉しいです。

私は、その前日に中高の校舎・アリーナを歩いてみました。小学校と違うのは、午後4時以降の中高の活気です。4時になると児童が全員下校してしまう小学校とはまったく異なる世界でした。クラブ活動をしている生徒たちの生き生きしている姿から、みんな学園生活を楽しんでいることが伝わってきました。そんなことを思いながら翌日クラブフェアが行われるアリーナに足を踏み入れてみました。そこは、中高のクラブ紹介のステージ、ブースの設置の真最中でした。その準備をしている生徒たちの中に桐光小卒業生の姿が実に多かったです。「元気かい?」「頑張っているね」という声をかけながら、実は元気をもらったのは私でした。私たちが育てたい子どもたち、育てなければならない子どもたちはこういう子たちなのだと改めて思いました。自分の好きなことを見つけて夢中になって取り組むことができる。楽しいことを自分で見つけることができる。友だちが自分を支えてくれることを実感でき、自分も友だちの支えになれることを幸せに感じることもできる。そういう子どもたちを育てていきたいと強く思いました。